

## 「対話と実行」座談会（H20.9.20(土) 仁淀川町）の概要

### 知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット及び「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」（以下のURL参照）を基に説明。

(<http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf>

<http://www.kochinet.ed.jp/kinnyuupurangaiyou.pdf>)

### 座談会

#### 【別枝地域の活性化の取り組み】

Aさん：私たちの地域は、愛媛県との県境にある別枝（べっし）という地域である。全国的な問題だが、限界集落の中に入っている。高齢化し、若い人がどんどん出て行く中で、高知県の三大無形文化財である秋葉まつりのこの里を、どうしても元気な里にしていかなければいけないということで、どのように別枝を活性化させていけばいいか、10回あまりの座談会を重ねた。そうしてできたのが、秋葉まつりの里を元気にする会・えんこ巖（いわ）である。地縁や血縁、同窓の縁などのいろいろな縁故が集い合って、一丸となって別枝地域を良くしていこうではないかということでできた。この会ができると同様くらいに、国の「ふるさと地域力発掘支援モデル事業」というのができた。これに入れてもらい、国からの助成をいただくということで取り組んで、認められることになり、別枝地域協議会が発足した。この間、9日、10日と全国大会があって、2名で参加させてもらった。私たちはこれを何とかまとめていかなければいけないと、いろいろと思案をしている最中である。今月22日には役員会を、28日には理事会をやって、どういう方向へ進めていくかを決めることになっている。高齢化で若い人がいないのでなかなか大変だが、何とか若い人につなげていくような場を作っていきたい、土台作りをやりたいということで頑張っている。

司会：えんこ巖は、仲間を増やそう、稼ぎを増やそう、ファンを増やそうという3本柱で進めている。

知事：秋葉祭りに今年行かせていただき、こんなにたくさんの方がおいでなのかとびっくりした。にぎわいという観点からも本当に素晴らしい。今後どうやってまとめていくか、どうやって若い人につなげていくかということをおっしゃったが、高知県にいろいろある取り組みでも、そういうことが大きな課題になってくるだろうと思う。イベントを1回だけやってにぎわったということも、これはこれで大切だと思うが、さらに、継続的に続けていくということが一つと、そしてできれば、実際に所得が上がるというか、稼ぎが出てくるという仕組みにつなげていくことが重要だろうとあっていて、それができるかどうか地域活性化につながるかどうかの大きな分かれ道だろうと思っている。ファンを増やそうということで、秋葉まつりを始め、しだれ桜や地域のいろいろな資源を上手に組み合わせて、年間を通じていろいろな取り組みをしていかれようというお話のようなのだが、段々とイベント同士のつながりが出てきて、多くのお客さんがおいでになる日数が少しでも増えていって、かつ、そのときに来られた方にいろいろと

地場の産品を売るような仕組みがしっかりできてきて、というふうにつながっていくと、経済の活性化にもつながっていくと思う。そういう中で、若い人の中に「残って（取り組みを）やろうじゃないか」という人が出てくるようになっていくのではないかと思う。農水省の「農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル事業」が取れているというのは本当にすごいことだと思うが、そこまでいなくても、県にも「高知県元気のでる市町村総合補助金」というものもあるし、今後、観光や産業振興の面でも、新しくいろいろな支援のメニューを用意していきたいと考えているところなので、また一緒にやらせていただきたいと思う。ちなみに、少しご紹介をさせていただくが、そういう皆様のお取り組みを県としても町と一緒にバックアップさせていただきたいという思いから、今、地域支援企画員を全県に60人配置している。仁淀川町には3名いて、地域支援企画員の総括として浜渦企画員、そして青木企画員と西森企画員である。県庁職員として、地域に常駐させていただいているが、地域の皆様の頑張りをバックアップさせていただきたいという気持ちであふれているので、よろしくお願ひしたい。

#### 【地域振興への支援、限界集落への対策】

Bさん：私たちは、昨年9月に高知大学生の地域共同活動ということで、4名の学生さんに来ていただいて、地域の方と一緒に、お宝探しや数回のワークショップを行った。後継者不足から荒廃している長者地域の棚田で、「長者DEキャンドルナイト」などを行った。「住民自らがやる気を起こして、活動しなければいけない」ということはよく耳にするが、地域住民にも理解していただき、自分たちでできることは、ある程度行動・活動をして、地域の活性化につながりつつあると思っている。しかし、住民力と言っても限界がある。ボランティア活動を通して、貴重な棚田を守りながら、ログハウスを建てて、地域の憩いの場、地域外の方々との交流の場ができたという話が盛り上がるわけだが、先立つものがなく、私たちが負担するにも限度があるため、これ以上前に進まない状況である。このような実情に対してよい方法や対策があればお願ひしたいと思う。

もう1点は、私たちの地域は、高齢者で一人暮らしの集落が多く、限界集落という感じにもなっている。今後の（県の）取り組みについてお聞ひしたいと思う。

知事：大学の学生さんと一緒に企画を検討されたんですか。よいことだと思う。また、キャンドルナイトというのはおしゃれで、きれいなものですね。

Bさん：はい。学生さんの提案で、地域おこしとしてキャンドルナイトをということで取り組んだ。地域の方にもたくさん参加してもらって、アンケートをとると「またやってくれ」ということで、今年も12月にやる予定である。県からキャンドルの容器も借りることとしているので、お願ひしたいと思う。

知事：先ほど申し上げたように、県はいろいろなタイプの支援策を持っている。財政的な問題もあり、限界はあるが、例えば、地域支援企画員も一緒に知恵を出させていただくということもあるだろうし、補助金という形で対応できるものもあるので、ご相談をいただければと思う。これは仁淀川町のお取り組みについて申し上げているわけではないのでお許しいただきたいが、

地域のいろいろなイベントが、どのように今後、例えば、地域地域の所得の向上や雇用の確保につながっていくのかということについて話をさせていただきたい。最近、大阪や名古屋や東京に行ったときに旅行会社の方と話をすることが多いので、その例で言わせていただきたいと思います。農家民宿や漁家民宿をやっておられる地域がたくさんある。これが本当のビジネスになるためには何が欠けているのかということ、私はいろいろ勉強している。都会の観光業者さんが言うのは、「4定」がしっかりそろっていないといけないということである。ビジネスをやっておられる方には釈迦に説法で恐縮だが、まず、「定時制」で、決めた期間には必ず受け入れる。そして、「定品質」で、来たときには必ず一定以上の品質が確保されていなければならない。もう一つは「定価格」。最後に「定量」で、受け入れられる人数が、例えば10人だったら10人までは、いつでも受け入れられる状態にしておかないといけない。「来たかったら受け入れてあげる」とか、「今はできないからだめ」とか、「来月くらいなら受け入れられるかもしれない」とかだと、なかなか旅行商品にできないというお話を伺って、なるほどと思ったことだった。いろいろなアイデアや取り組みを、今後、雇用・収入につなげていく仕組みづくりといったときに、一段越えるべき壁があって、それが、定時、定品質といったことをしっかり確保できるかどうかではないかと思っている。都市と農村の交流といったことをやっておられる地域も多いが、それが伸びていくかどうかは、そういう点にかかっているようである。そうするためにはどのようにすればいいか、都会のユーザーの考え方はどういうものかなど、県もしっかりと把握して、地域地域に情報を流していくという取り組みがすごく必要だと思っている。東京事務所を強化して、政策についての提言・交渉の拠点を作ったが、都会でもう一つ、いわゆる情報発信とともに、ビジネスをやって、セールスをやって、そしてそこで得た情報を生産地に流していくような拠点づくりについて、もう一度考え直さないといけないのではないかと考えている。

2点目の、独居老人の方が多い、限界集落という問題については、非常に深刻な話だと思っている。中山間対策の課題として、高齢者が安心して暮らせる環境づくりが必要ということで、水の確保、移動手段の確保、生活物資の購入などへの対策を県が講じていくということが一つ。そして、もう一つは、高齢者で一人暮らしの方で、さらに障害を持っておられたりすると、本当に大変である。そうすると、どうしても、地域での支え合い、助け合いの仕組みがないといけない。そのために、集落やコミュニティーの維持・存続するための仕組みづくりについて、対策を講じようとしている。この2つについて、「中山間地域生活支援総合事業」として、大きく3つのメニューで事業を行っている。生活用水の確保や車の購入、さらにコミュニティーの共同作業に対する支援など、多様なメニューをそろえていて、地域の実情に合わせて手を挙げていただいて、それに対してバックアップをさせていただくものになっているので、こういうものも縦横に使っていただきたいと思います。実際、仁淀川町はコミュニティバスを導入されて、非常に好調である。これなども参考にさせていただいて、作らせていただいたものである。ただ、実際、地域地域でいろいろと事情も違って、やってみてうまくいかないということもあるかもしれないので、不断の見直しを行って、現状に合った対策を作っていきたいと考えている。

【地域のまとめ、自主防災組織の取り組み、森山女性なんでもクラブの取り組み】

Cさん：私の地区の話はちっぽけなことであるが、事の始まりは、中四国農政局の方が見えられ

て、「田舎には都会にないいいものがたくさんある」、「日ごろは気がつかないものがみんなお宝だ」という話をいただいたことである。お年寄りから教わったよもぎまんじゅうや、東南・南海地震に備えての非常食の作り方などが宝だというお話があった。森山地区の住民は約 80 名で、タイミング良く、地域に子どもさんがいない時代に、12 名の小・中学生がいる。70 歳以上のお年寄りが 40 名、残りの 20～30 人くらいが中間の方で、他の地域にはないフレッシュヤングという青年団がある。森山を維持していくには、青年団が大事だと思う。そして、青年団と、次期青年団になるであろう若い子どもたちが一緒になって、敬老会でお年寄りを楽しませてくれる行事が 1 年に 1 回ある。地区全体でやっていて、何があっても皆さん出席してくれるので、何をやってもまとまるという地域になってきた。平成 16 年に大きな災害があって、民家への被害や人の怪我はなかったが、避難勧告が出て、中央公民館に避難した。それを契機に、地区の若者が立ち上がって、自主防災組織を作ろうということで、平成 18 年に設立された。国交省の大渡ダムさん、越知土木さん、高知県の地震・防災課、佐川警察署、高吾北消防署の皆さんの協力を得て、勉強会をし、訓練をし、先日は佐川警察署のご厚意で、ヘリコプターによる搬送訓練も行った。そして、起震車体験は、夜地震が来るかもしれないということで、夜に行ったところである。

次に「森山女性なんでもクラブ」だが、高知女子大の学生との懇談会をきっかけに交流をしていて、お餅作りをしたりしている。今さっき知事さんが言われたような、都会の方が田舎に来て一晩二晩泊まるというようなこともしてみたいと思うが、宿泊所もなく、すぐにはできないので、少しずつ考えようと思っている。個人の家でも、民宿みたいでいいのではないかとということで、「田舎へおかえり」というふうに帰ってきてくれるようなところを作ったらどうだろうという話も出ている。

みんなが頑張っていて、何があっても助け合っていくという地域づくりに一生懸命である。

知事:( 振る舞っていただいたお茶とおまんじゅうを食べて )おまんじゅうもお茶もおいしいです。素晴らしいと思う。

Cさん: そのお茶は、高齢化もあって、地元ではなかなか採ることができない状況である。一番茶を採ったら、後はもう切り捨てている。大学生などが泊まりで遊びに来て、お茶を摘んで、製品にして持って帰るといったことも考えたりもしている。まんじゅうは、田舎のまんじゅう、田舎のお茶団子だったのを、大学生が、半月スイーツ、お茶スイーツという名前をつけてくださった。とても好評である。

知事: まず、自主防災の話について、自主防災組織を増やしていくことが、地震対策ということもあるが、日常の見守り活動ということも含めて考えると、非常に大切なことだと思う。先ほどから何度も出ているが、高齢者で一人暮らしの方が多くなれば多くなるほど、こういう組織がしっかりあるということがとても大切である。森山地区では、皆さんがお互いのことをよく知っておられるということで、県内でも理想的な姿だと思う。私はよく各地域で「自主防災組織をもっと作らないといけない。これが大きな課題だ」と言っている。パンフレットの 4 ページの 4 の 2 の安全・安心なまちづくりというところで、「地域のつながりを支援し、県民と行政

が一体となって安全・安心なまちづくりを進めます」と書かせていただいているが、これは端的に言って自主防災組織のことである。これをバックアップしていきたいと思っているが、地域の皆さんで互いが互いのことを知ろうとすると、情報が知れ渡ってしまうのではないかと、ということがあって、ネックになっている。森山地区では、皆さんで協力されて課題を十分克服されていて、素晴らしいと思った。

Cさん：地域の皆さんの同意を得て、緊急連絡網を作っている。森山はちょうどくらいの（規模の）地域なのでできるが、今は本当に難しいと思う。

知事：個人情報保護法ができたという関係もある。同意を取ればできるはずだが、なかなか手間がかかって、実際にはできないという話がある。森山地区は理想の中の理想だと思うので、是非今後も頑張ってくださいと思う。

先ほど「4定」の話をしたが、都会の旅行者さんがみんなこういうことをおっしゃるという話で、県が観光の振興を考えていくに当たって、まず自戒をしないといけないことだと思っている。ゆえに「4定がそろっていないと全部いけない」などと偉そうなことを言うつもりは全くない。むしろ、おっしゃるとおり、「田舎へおかえり」という感覚からまず始められるということが大きいと思う。そして、一番茶の後の収穫を都会から来た人に体験してもらおうといったこともやってみたらどうかというお話は、すごくいいアイデアだと思う。それには、県外からだけでなく、高知市からというのもあると思う。今、県全体として、今後少し力を入れていかないといけないと思うものの一つに、県内でも都市部の子どもたちに、1次産業のいろいろな体験をしてもらうということがある。1次産業の後継者対策ということもあるが、1次産業の魅力をもっと、若い人にも知ってもらいたいと思っている。農業の後継者対策は他にもいろいろ考えないといけないが、その一つとして、都市部の小・中学生に、ミニ修学旅行のような形で1次産業の体験をしてもらうということを増やしていこうと、教育委員会とも一緒に話をさせていただいたりしている。

Cさん：名野川小学校では、高知大学生の力を借りて、畑を作ってそばを蒔いて、手入れをして、刈り取って、おそばを作って、地域の人々に食べさせるということをやっている。是非高知市の小学生を連れてきていただきたい。

知事：おもしろいと思う。教育委員会を通してよく話をしてもらえばいいことだが、今そういう方向で機運が盛り上がりつつある。今年初めてやろうと始めたことなので、実際に行き渡るにはもう少し時間がかかると思うが、そういう方向でいこうとしている。

#### 【林業の振興策】

Dさん：高知県は森林率が日本一で、この地域は94%と県全体より10%くらい高い。私は木材を売る中で、「木を買ってくれ」というだけの営業ではなかなか難しいということで、住宅に使われる資材をまとめて一緒に売っていこうと協議会をつくった。土佐藩の藩政時代には、土佐三白（さんぱく）と言って、3つの白いものを売って財政を潤したということだが、その白いも

の3つすべてを扱っている。まずは土佐和紙で、これは壁に貼るクロス。そして漆喰で、内素材や外素材がある。最後に木材で、特に私が売りたいのはヒノキである。高知県のヒノキは非常に品質が良く、県外の方にも非常に気に入られている。先ほどから知事さんは付加価値ということをしきりに言われているが、林業に関して付加価値は非常に大事なことである。山の木をそのまま県外に売るとすれば、1立米当たり3,000~5,000円のお金が地域に落ちる。地域に住んで、山師をやられている方が、それを切って生産するということになれば、1立米当たり12,000~15,000円が地域の付加価値になる。その木材を県外に売ってしまうと、12,000~15,000円の付加価値しか残らないが、それを地域で製品にするとすれば、それが45,000~50,000円という金額になる。歩留まりがあるので正確な金額ではないが、最終消費（形態）にすることによって、最高の付加価値が望める。高知県は、農業でも林業でも付加価値の付け方が非常に下手で、私は商売で県外によく行くが、1次産業が非常に盛んなところは、付加価値を付けることが非常に下手だと思う。それで、最高の付加価値をつけるために、私は今仕事をしている。私がやっていることは、木材を加工して、販売するという仕事だが、年間5,000立米くらいの取引で4億円くらいの売上げがある。高知県は非常に林業が衰退していると言われる。どうということかと言うと、私自身が木材協会にいるが、木材協会は、土佐ヒノキを営林署から安い金額で手に入れて、それを高く売るといふ殿様商売をずっと長年やっていたので、今現在の林業の置かれている状況がなかなか理解しづらくなっている。今、木材としては、工業化部材が求められているわけだが、そういうものを作る施設が非常に少なく、製材業が困っているという状況があると思う。そういうところに県の支援をいただければと思う。

今、国の政策として、新生産システムというものがあるが、本当にこれは高知県の林業のためになるのかということ常々考えている。国は数年前から、大規模に生産して、大規模に販売しようという政策をずっと続けているが、新生産システムでも同じことをまたやろうとしている。それが高知県にとって本当にいいかという問題だが、漁業は漁に行ったらその日にたくさんのお金が入るかもしれない。コメを作ったら、88日経てば食べられる、売れるかもしれない。しかし林業というのは、50年、60年というサイクルが必要で、そういうサイクルに合った林業経営を考えないと、このままでは高知県の林業は非常に厳しいと思う。

私は木材を売りに行ったときに、和紙の話や漆喰の話も一緒にする。最近はそのプラスして、地域の話、例えば、地域のトマトやお茶がおいしいことなどをしゃべったりして、また、年に1回贈り物をするときには、地域のものを使ったりと、地域のことを一番に考えてやっている。ここの地域にはこんなにいいものがあると言っただけで、いろいろな情報は伝わっていくので、皆さんで地域おこしにつなげられればと思う。

知事：木材、林業の今のお話は非常に参考になった。3点お話ししたい。

1点目に、木材の最終需要をどの段階でとらえるかという話について。製材会社さんに出してしまったら、そこで製材されることを最終需要としてとらえるのか、そこから先の、製材にして、木造住宅なら木造住宅を作るといふ段階を最終需要ととらえるのか、ここの見方を、より広く取らなければいけないのではないかと私は前々から思っていた。嶺北では、れいほくスケルトンというお取り組みをされ始めている。加工しやすいように初めから加工しておくという取り組みもあるであろうし、Dさんがおっしゃった和紙と漆喰とをセットにして売っていく、

木の住宅のための関連素材をセットにして売っていくということも、魅力ある家づくりという点で重要だろうと思う。私は、最後に木を使うところをいかに探せるかということが、今後ものすごく重要なのではないかと第一に思っている。木造住宅に対する支援措置には、県のものもある。もう一つ、公共用施設における県産材の利用率を上げていく取り組み、これはやっと去年全国平均くらいになったが、これを上げていく取り組みもそうだと思う。とにかく最終需要、消費者の手に渡る段階までをにらんだ形での林業の振興が必要だろうと思っている。森林部などには、そういう視点からもものを考えてほしいと、今いろいろ検討も進めているところである。それが第一である。

2点目に、新生産システムが、果たして高知県に当てはまるかどうかということだが、これは、大規模に伐採をすると、資源が復活するのに時間がかかって対応できないようになるのではないかとということですか。

Dさん:生産システムの今の流通を県は把握されていると思うが、木材市場に木材が集まらない。どうしてかということ、直販システムである。なので、多分6割以上が県外に流れている。現在は、立米当たり12,000~15,000円の付加価値が高知県に残っているということだと思う。その県外に流れている部分を、県内で付加価値を付けたら本当にいい産業になると思う。小さな会社1社で年間4億くらいなので、それが100社になったら、400億というすごい金額になる。現在、200社くらいの製材工場しか残っていないと思うが、やる気のある製材工場が、現在必要とされている商品、最終の付加価値商品を生産できれば、県外の業者はそういうものを狙っている。県外の名木を産出する地域は、木を育てるために非常にコストをかけている。高知県はそういうことにコストがかけることができていなかったが、今は和室というものがなくなって、枝打ちした商品も、節だらけの商品も、同じ価値になっている。今は、名木といったものが全く必要なくて、安くいいものが欲しいという時代になっているのではないと思う。

知事:分かりました。また参考にさせていただきたいと思う。森の工場も、新生産システムも、目指すところは、材を産出するためにいかにコストを落としていくことができるかということである。特に本県などは山が急峻なのでなおさらである。新生産システムは、流通ルートができるだけ一元化して効率化しようということだと思うが、これはコスト面からどう対応するかということを追求すると、こういう施策になるのではないかとということだと思う。ただ、おっしゃったように、いわゆる名木ではなくて、工業資材として木を使うという割合が増えれば増えるほど、むしろその辺りの効率化がより一層の課題になってくるのではないかと感じる。今、全体として、一番前に進めたいと思っているのは、森の工場づくりで、山に作業道をしっかりつけ、高性能林業機械を入れて、効率的に取ってくる。そしてもう一つは、集荷のシステムをできるだけ効率化を図るべく対応していくということである。流通の方は、いろいろ課題があって、今はむしろ後ろ向きな方向になってしまった。非常に残念なこともこの間あった。他方で、業者さんがまとまろうという新たな動きも出てきておられるとも伺っている。生産から流通まで、コストをいかに下げるかという問題に対応するため、取り組んでいかなければいけないのではないかと考えている。

最後に、トマトなどの話をされたが、私はそのように産業を関連付けていくということが、

地域おこしという観点では重要ではないかと思う。1次産業と1.5次産業、いわゆる食品加工、また、1次産業の産地を観光の地として活かしていく、教育の場として活かしていく。このように、多様な産業に波及していく、関連付けていくという取り組みは重要だと思う。

～休憩～

【生産者市の取り組み】

Eさん：カット野菜の製造加工会社で、食の温故知新をコンセプトに仁淀川町のうまいもの探しのお手伝いもさせていただいている。私は、学校に行っている期間を除いて現在までこの土地で暮らしている。若いときは田舎暮らしに少し物足りなさを感じていたが、インターネットを暮らしに取り入れ始めてからは、山里にいながら何不自由なく生活ができることに喜びを感じている。会社の方もやっと高知県内全域のスーパーなどに取引先を確立することができ、販売ルートなどもしっかりしてきたところである。そこで、逆に、地域で取れるおいしいものを山里から発信していくことができないかなと思った。それで、こんにゃくやおいしいおまんじゅうなどが入ったギフトセットなども、夏と冬にやっている。また、それとは別に、スーパー全域に販売流通経路ができたことで、それを利用する一つの方法として、今年の3月からナンコクスーパーの高須店で、清流市と名づけた生産者市を始め、仁淀川町の農家が作った野菜などを販売している。最初は、こちらから農家の方をお願いして作ってもらっていたが、最近は農家もほぼ全部売り切れることにやりがいを感じてきたようで、農家同士で情報交換しながら、張り切って野菜を作り始めている。今まで遊んでいた土地で、新しい品目なども作ってくれて、田舎でも活気がでてきたかなとすごく喜んでいる。私たちお世話する側もモチベーションが上がってきている。

知事：素晴らしい、模範的なお取り組みだと思う。地産地消、地産外消という言葉があって、私もコマーシャルで、「まずは、地産地消から」と言っている。実は、「まずは」に力を込めて言っているつもりである。いろいろなステージを想定していかないといけないということで、先ほど、都会に売り込むという話をしたが、地元で売れないものは都会でも売れないそうである。まず、地元で売っていく。地域のものを地域で売る、そして、地域のものを外から来た人に売る、もう一つ私が大きいと思っているのは、地域のものを高知市で売るということである。高知県は人口79万人の小さい県かもしれないが、高知市の人口35万人というのは、全国の市の中でも結構大きい方である。この大消費地をどう活かすかというのがポイントではないのかと前から思っていて、正にEさんがやっておられるようなお取り組みこそ、地域の栄えにつながることはないかと思う。全県内に広がっていけばいいなと思った。

ちなみに、これはEさんの話とは違う話になってくるが、中心商店街の活性化と大量販店との関係についてという話である。高知でも大量販店と中心市街地との関係はなかなか難しいことになっていて、中心市街地が段々衰えてしまっているという状況になりつつある。だが、高齢化が進む、そして、環境対策が重要というときに、街はできるだけコンパクトに固まっている方が望ましいと思う。例えば、帯屋町周辺を回るだけで、公共の手続きもやって、病院も行って、買い物にも行って、全部用事が済むという街が望ましい。帯屋町に限らないが、中心市街



地はそれなりに栄えていくように考えていけないと思う。ただ、大量販店とどうやって勝負をしていくのか。同じことをやったら絶対にはかない。例えば、ある商店街に行ったら、高知県内のいろんなところのいいものがそれぞれそろっている、高知県内のいろんな市町村の一種のアンテナショップみたいなものがあって、リトル高知みたいになっているという形であれば、観光客の方も来られるし、また、高知市の人も喜ぶのではないのかなと思ったりもしている。仁淀川町は高知市でやっておられるんですか。

司会：前はあったが、今はないです。

知事：立地の点などいろいろ問題もあると思うが、中心商店街が大量販店に負けないようにしていくための一つのよすがとしては、大量販店とは根本的に違う流通ルートを持つておくこと。高知県内の産直のいいものが、その一か所に集まっているというような姿を作っていくということで、対抗できるのではないかという話を、よく商店街の皆さんに申し上げる。「そんなに簡単にいかない」とよく怒られるが、高知市の中心商店街の今もまだあるにぎわいを活かして、逆に地域地域も栄えるようにしていく仕組みづくりとして、こういうのも一つアイデアではないのかなと思っている。Eさんのお取り組みについては、素晴らしいとしか言いようがないと思う。またそういったお知恵があれば、是非賜りたいと思う。

#### 【シナアブラギリ栽培への取り組み】

Fさん：今回の機会に特にご説明させていただきたいことは、シナアブラギリを育てて持続可能な所得向上を目指したいということである。「地球の未来はきっとあなたの手で変えられる」ということで取り組んでいる。なぜシナアブラギリなのかについては10点あって、まず、持続可能な循環型社会の構築に役立つ。そして、脱石油でCO<sub>2</sub>の削減、知事さんの説明にもあった、CO<sub>2</sub>±0宣言に寄与できるのではないかなと思う。3番目に、森林土壌の再生。4番目に、川や海の再生。5番目が、もう一度山林を収入源に立て直したいと。6番目として、農山漁村の活性化。山林を収入源として、我々の活性化が図れると思う。7番目に、シナアブラギリという木は非常に成長が早く、5年で13~14m、12~13cmの径に成長する。さらに、やせ地や、干ばつ、害虫に非常に強い。8番目として、花が咲いて実がなる。9番目は、有毒性がある、食料と競合しない。バイオマス燃料ということで、軽油代替等に使える。10番目に、植物性の乾性油原料にも使えるということで、非常に用途が広い。これは昭和20年ごろに、既にこういうことをやっていて、実証済みで、今新たにこれができるのではないかなというようなことではない。外国では、かなり広大な土地で栽培を始めているというような状況である。次に、どこで栽培するかというと、まず、スギやヒノキの間伐後に複層林の下層木として栽培する。落葉樹で葉っぱが非常に広いので、雑木の繁殖を抑えられるという効果もあると思う。そして、スギ、ヒノキの皆伐後の専用林として栽培する。それから、耕作放棄の農地、公園や災害復旧地の植栽として。最後に、県内をあちこち見て回ったが、昭和20年前後に栽培されていたということで、土佐清水辺りには、木を切ればこれが生えてくるというところもかなりあるようなので、現存している木の継続育成である。誰が栽培するかについては、まず山林所有者、そして、耕作放棄の農地の所有者。それから、仮称だがヤトロファの会というものを10月26日に立ち

上げる予定であり、借地オーナー制で作らせる。そして、災害復旧地等に国や県や市町村が植えていけばいいと思う。種子の収穫だが、地上に落ちたものを拾い集めればいい。わざわざ叩き落としたり、木に登って取る必要はない。なぜかという、種子には毒性があって、虫や小動物から守られて傷まないし、なくなる。だから、収穫期間が長い。

先ほども申したが、仮称ヤトロファの会を設立して、当面100万本の植樹をと利用技術の確立を目標としている。我々が、知事さん、町長さんをお願いしたいことがある。お金をいくら出してくれというようなレベルの考えはしていない。以前、知事さんにも資料としてお渡ししたが、その中に油の含有率が25%くらいから60%くらいという表現がある。そのあたり、実際はどれくらいの油の含有量があるものなのかというようなことを、工業技術センターには搾油機があるようなので、(調査の)お願いをしたい。また、利用方法が、軽油の代替と塗料だけではもったいないので、もっとこれの活用方法を見いだしたいと思っている。そこで、学者の先生方の取り込みというか、工科大等との連携で、研究の一つのモデルにさせていただけないかとか、そういうところを、町長さん始め、知事さん等にご足労をいただいて、是非、日本一のエネルギー源を高知で目指したい。仁淀川町は既にバイオマス実証実験をやっているの、そこで組み合わせれば、石油製品を全然使わず、さらに持続可能なバイオマスエネルギーということで、環境立県の推進のお役に立てるのではないかと思う。10月26日、我々で何人集められるか分からないが、知事さんに来ていただき、喝を入れていただけるとありがたいと思っている。

知事：県にはいろいろ研究機関があるので、工業技術センターなのか、森林技術センターなのか、今は分からないが、話をつながせていただきたいと思う。地域支援企画員がお話を詳しくお伺いさせていただいて、整理した上で対応させていただきたいと思う。バイオの関係について、アブラギリのことでなく、一般論として申し上げますと、まず、外国が大量に生産をしている場合があるので、コストで太刀打ちできない場合がある。外国では、見渡す限り地平線のようなところで、バイオの燃料を作ったりしているので、対抗できるかどうかという問題が一つ。そして、結果としてコストが見合うかという問題もある。

Fさん：外国では、ヤトロファとあって、若干種類が違うが、ほぼ同じものを作っている。ただ、10年経って実がなるころになれば、外国産が安いということではなく、物価もさして変わらない時代が来るのではないかと考えている。地域支援企画員の青木さんにも、アウトラインをお話ししているので、また、詳細をご説明しながらお願いしたいと思う。

#### 【茶の消費拡大】

Gさん：いつも地域支援企画員さんにはお世話になっている。平成6年に県の応援を得て、池川茶業組合を設立して、約14年になる。当初は比較的小茶の価格が良く、バブル時代もお茶は非常に安定なのかなと思う時代を過ごしてきたが、ペットボトルが出てきたことと、産地表示により、ここ6年間ずっとお茶の価格が下がってきている。今年あたりは、生産資材も、燃料が1リットル当たり120円、肥料は天井知らずの値上がりという非常に厳しい状況である。私どもはずっと、静岡に茶を100%近く出していた。その静岡に出していたものが、ここまで価格が落ちてきた。しかし、ただ指をくわえて衰退を待つということではなく、積極的に攻めて出

るということで、細々ではあるが、1.5次産業の小売をやってきた。それを、より力を入れて、これからやっていかなければならないと思っている。お茶をどのように加工して売るかということと、もう一つは、お茶を飲んでもらって、消費者に納得していただいて、直接買っていただく、荒茶で出すのではなく、小売をいかに増やしていくかということを考えてないと、これから先、静岡の市場だけを頼って生きるということは非常に困難な時代になってきたと思う。その中で、今年、関西茶品評会が高知県であって、農林水産大臣賞を取ることができた。付加価値という点と、高知のお茶がいかに良いかということを示すものとして、私たちが喉から手が出るくらい欲しかった賞である。品評会では、仁淀川流域で3点が入賞しており、仁淀川流域のお茶は品が良いということに自信を持っていいのではないかと考えている。もう一つ、知事さんをお願いしておきたいが、この間話した商社の社長さんが「もう日本人は腐らない」と。「なぜですか」と言うと、「防腐剤漬けである」ということであった。ペットボトルのお茶に入っているビタミンCは酸化防止剤である。昔の人が「宵越しの茶は飲むな」と言うように、お茶というのは変質しやすい。急須に入れて飲むお茶を、もう1回多くの人に知っていただき、買っていただくよう努力をしたいと思うし、また、県庁や学校給食で、県内で取れたお茶を消費していただくようお願いしたいと思う。

知事：一つ質問で、静岡に出される時は、仁淀川町産のお茶であるということが分かる形で出されているのですか。

Gさん：静岡で非常に評価を受けていた時代は、仁淀川の茶は量的には少ないが、種茶として、コメで言うなら匂い米という形で非常に珍重されて、買ってくれていた。非常に価格も良く、ペットボトルが出るまではあぐらをかいて生きてきたという状況だった。

司会：そのお茶は静岡ブランドで出ている。こちらがブランドを持っていないので、今になって、焦ってばたばたもしているという状況である。酸化防止剤はビタミンCですので安心してください。

知事：まずは受賞おめでとうございます。これから、仁淀川町としてブランドを作っていくということで、農林水産大臣賞ということを是非活かしていただきたいと思う。まず、先ほど申し上げたとおり、都会における売り込みの強化を真剣に考えていきたいと思っている。2番目に、例えば高知市などでも、もっと売り込んでいける体制づくりが何か考えられないか、知恵を練ろうとしている。中心市街地などにおける売り込みの拠点、機会の提供を、我々ももっとやっていくべきではないかという思いで、そういう場も用意していきたいと思っているので、是非ともご活用いただきたいと思う。また、給食には、地産地消をできるだけ進めたいと思っている。県内の給食は、コメについては99%地産地消である。野菜が大体60~70%くらいで、魚は3割以下である。冷凍施設が必要だということと、給食ですぐ調理できるようにするためには、1次加工、頭を落として、内臓を取って、開いておいてということをしていないと、すぐ調理できないそうである。そして、品がいつもそろそろというわけではないということもあって、こちらはなかなか地産地消ができないが、お茶ならできると思う。給食のことについて勉

強している部署があるので、そこに話をしたいと思う。

#### 【Iターンと茶の振興対策】

Hさん：私はIターンでこちらに来たが、Iターンという話をすると、いつも「何でここに来たのか」と聞かれる。今、町内の方がたくさんいるので、ちょっと言いづらいが、すごく地味な地域で、高知市内に住んでいる人に、「池川に住んでいる」と言っても、「池川ってどこ？」と良く聞かれるくらいで、その地味なところ、本当の田舎らしさというような雰囲気はすごく好きで、ここに来た。観光の話も出ているが、この地味な良さをなくさないように、うまく観光客の方に来ていただくと、結構いい売りになるのではないかと、お客さま慣れしていないそのたどたどしさがとてもいいのではないかなと思っている。「ここに来たい」と思ってから、「何をしよう？」とってお茶を選んだ。私は東京生まれで、高知大学の学生時代に仁淀川町のお茶を飲んで、すごくおいしいと思って、それからずっとこのお茶を飲み続けている。それで、お茶をやってみたいと思って、やり始めたが、すごくおもしろいし、周りの皆さんのレベルがすごく高い。今まで静岡のブランドで売っていたからこそ名前が出ていないが、この良さを知ってもらえば必ず全国でも売れていくお茶ができていると思う。ここ数年間で、ものすごい勢いでお茶の値段が下がって、先ほどGさんがおっしゃっていたが、肥料の値段が上がり、高齢化率も上がり、産地としていつまで持続できるのか、これからお茶をやろうとしている身にとっても、とても不安な状態である。私がやっていけるようになったところには、産地崩壊していたなどということに本当になりかねないかと、今しみじみ思っている。本当はここに来てのんびり暮らしながら、少しずつ皆さんのお手伝いをして、元気になっていけたらいいなと思っていたが、もうそんな場合ではない、スピード感を持ってやらないと、気がついたころには本当にもう手遅れになりかねない、あと2年とか3年のスパンで何か手を打っていかないといいなと、来てからすごく焦っている。どうしたらいいかはまだ分からないが、できることから一つ一つやっていきたいなと思っている。ただ、何もできない私に来てだけで、皆さんがすごく喜んでくれて、かわいがってもらって、ラッキーな立場だなと思って、ここに来て本当に毎日楽しく過ごさせていただいている。

知事：仁淀川町は本当に深山幽谷という感じがする。東山魁夷の絵のようにきれいで、それは仁淀川町の素晴らしさだと思う。

原油価格が上がって、資材の価格が上がってという話、本当に大変でいらっしゃると思う。今、県の（燃油）対策の中に、お茶に対するメニューはないかもしれない。漁業の燃油対策やハウスの多層張りへの支援策はあるが、お茶は今のところは（燃油対策として）対応するものがない状況で、また実情も勉強させていただきたいと思う。資材が上がって、コストが上がってくるということについて、私などが気楽なことを言うと怒られるかもしれないが、やはり商品の単価を上げて、売値をいかに上げていくかということで、克服していくということが、正攻法の中の正攻法であると思う。そのときに、静岡茶として売られるのではなくて、仁淀川町のお茶としてブランド化して、付加価値を付けて売ることで、危機を克服するということではないかと思う。ただ、いきなりそういうことが本当にできるかということもあると思うので、県も、販路の開拓や売り込みの場を用意することなどについて、一緒に汗をかかせていただき

たいと思っている。ペットボトル(の普及)で(値段が)下がるというのは、どうしてですか。

Gさん：ペットボトルには簡便さがあって、すぐ飲めるということがある。しかし、急須で淹れて飲むお茶は、手間暇さえかけていただいたら、それより安く、おいしいお茶が飲める。それをもう1回知ってもらおうことの方が大事だと思う。

#### 【インターンシップの推進】

さん：私は大学3年で、もうそろそろ就職活動をしなればいけないと思っているが、高知県には仕事がないということを大学生もすごく感じている。先生の方からも、氷河期に入っているというふうに言われていて、正直高知県で就職するのは難しいかなと、そのせいで、県外に目がいつてしまうのかなと感じている。今、私は仁淀川町でインターンシップをさせていただいている。旧池川町出身で、小学校、中学校と池川で過ごして、高校で高知市内に出たが、自分の住んでいる地域の、あまりよく理解できてなかった問題や現状を、1回外に出て、インターンという形で戻ってきて、知ることができた。それで、何が言いたいかというと、インターンシップが大事だなと私自身が感じている。短期で企業などに行って、職業体験をするというのは、その職業を知ることでもできるし、自分に合った仕事を知ることができるということを感じた。今までは、企業などで働いて、自分の生活のためにお金を稼ぐことが大事だと思っていたが、地域と接して、「今、何が大事なのかな」と考えて、戻ってくるというようなことも大事なのではないかと感じた。なので、学生が、田舎に職業体験に来るということをもう少し支援していただけたら、地域のためにもなるし、自分が何をしたらいいか、何ができるかというやりがいも見つけられると思う。嶺北地域では積極的に大学生が入っているようだが、西の方ではないということなので、インターンシップという形を基に支援していただけたらいいのかなと思った。

知事：若い人がどんどん県外に流出していつている。自主的に選んで出て行くということは仕方がないと思うが、仕事がなく出て行かざるを得ないということと、もう一つ、地域地域で、実は魅力的な仕事などがあるということを知らずに、就職担当者が「県外に行きなさい」と言っていて、県外に安直に行ってしまうということ、この2点はできるだけ何とかしたいという思いがある。先に県外の企業と話をしてしまうと、県内の企業さんに就職しようという人がなかなか出てこないということで、今年度は、県内の企業さんにもっと前に出てPRしてくださいということをお願いしたら、7月末の段階で、去年に比べて県内企業からの求人数が20%増えた。県内企業さんも、もっと学生さんに、我々はこういう魅力的な仕事をしているということをお話するべきではないかと、第一に思っている。そして、学生さん側からのインターンシップというお話について、大いに私も賛成である。実は去年から、工業高校の方々に、県内の製造業の会社をいろいろ回るといったインターンシップの経験をやってもらった。大学生ではなく高校生だったが、これは非常に好評だった。去年はサンプル的にやっていたが、効果がありそうだったので、今年から全部の工業高校でやってもらうようにしたということが一つ。もう一つは、農業などの1次産業の関係の高校などの皆さんにも、農業体験、林業体験、水産業体験を今年からやっていただくようにし始めたところである。こういう2つの取り組みを高校生まで

の間にできるだけやってもらうことで、魅力を感じてもらい、1次産業の素材を使ったミニ商社のような仕事に魅力を感じて若者が残られるパターンというのを、すごく期待している。実際、高知県内の村の中でも、そういうことを盛んにやっておられる村では、若年者の人口がこの10年で増えたりしている。町々、村々のいろいろな積極的な取り組みが、若者をひきつけてくるといふこともあると思う。ただ、その前提として、どういう仕事があるのか、どういうことを地域でしているのかということについて、知ってもらいという取り組みが必要だと思う。インターンシップをもっと大事にするということ、我々はそういう方向性でやっている。高校生までは、県立高校ということもあって、もっと盛んにやるべしという話をしてきたが、大学生は想定していなかったもので、大学版ということをもっと考えた方がいいのかもしれない。勉強させてもらう。どういうことをやっておられるのか、後で詳しく教えていただきたい。

(会場の方からのご意見等)

【国道494号の改良の手法】

Jさん：道路の改良について、一つ聞いてほしいことがある。国道494号が、ずっと改良されている。仁淀川町から久万高原町にかけて、10年くらい前までは促進期成同盟などがあり、議長や町長さんなどが一緒にやっていたが、これも立ち消えになっている。私が今日言いたいのは、明戸岩(みょうといわ)大西というところで、700mくらいを10年間くらいにわたって地元の業者が改良している。高速道路のようにとっても立派な道路である。これは全くの無駄づかいではないかと思う。県の役人の方は、20年、30年前の交通の需要の予測などを見て、計画を立ててやっていると思うが、高齢化で、人口が減り、当然車の通行量も減っている。「1回行政が決めたことは、引き返さない」と言うが、20年前の計画をただやらせるのではなくて、時代に合わせて、あれほど広い幅の道路はいらないので、幅をもっと狭くして、その分改良の延長を長くしてほしい。機敏な行政の対応で、有効に税金を活用してほしいと思う。

知事：分かりました。そういう姿勢でやりたいと思うが、個別路線のことなので、今すぐお答えができない。用地取得済みのところから2車線で整備中だが、他方で、歩道を中止するという形で縮小する工夫はしているようである。経緯を調べたいと思う。

(知事のまとめ)

皆様、長時間にわたりまして、誠にありがとうございました。本日、本当に地域地域の厳しい状況のお話もいただいたが、他方で、そういう中でも、こういう形で前向きにやっていくという非常に積極的なお話もたくさん伺えたと思う。仁淀川町が活発にいろいろなことに取り組んでおられるということを感じたし、また、将来に希望の持てるまちづくりというものの一つの形を伺わせていただいたと思う。私自身、今日は元気をいただいたような思いがする。是非とも今後とも頑張りたいと思っていますし、県としても、そのお取り組みなどをいろいろ学ばせていただいて、今後活かさせていただきたいと思う。「対話と実行」座談会で、一番いけないのは、聞きっぱなしにすることだと思っている。今日のやり取りについては、個人情報に配慮して記録を作り、関係の部局で共有して、参考にするようにしたいと思う。本日は本当にどうもありがとうございました。